四高・「超然主義」の神話誕生
～河合良成の校風改革運動と時習寮の「38名」～

The Rise of the "*Chozen*"-ism Myth at the Fourth High School Student Dormitory

金沢星稜大学人間科学部准教授　　井　上　好　人
INOUE, Yoshito

はじめに

四高の校風を一言で表徴する「超然主義」。高山樗牛の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」を引用したとされるこの宣言は、時習寮をめぐる印象的なエピソードと共に語り継がれ、一高の「籠城主義」に対する四高の伝統的な校風として内外にアピールするのに貢献してきた。

この「伝統」は、四高にあっては明治三十年代末から四十年代初頭にかけて、同時期に旧制高校を席巻した校風論および校風改革運動を背景に、生み出されたものである。一体、誰によって何のために創られたのだろうか。学生のリーダーはどのような意志をもち、周りの教師たちはどのような思惑をもって見守っていたのだろうか。

小論は、“当時の学生風紀が乱れていたから”といった言説には与しない。校風論は、高等中学校時代から「いつの時期にでも問題になったもの」（筧田　1968、43頁）であり、その際「風紀の紊乱頽廃」を前提とするのは校風論を語る上での方便・作法であったからである。例えば、四高の明治二十年代末の状況を嘆く論調の例として、「日清戦争の直後として……（中略）……四高風紀の紊乱頽廃は、甚しいものがあった」（『時習寮史』13頁）がある。同論のネタ（出典）は、二上兵治の回顧「予が四高に入学せしは明治三十年なりしが其の頃の四高は校紀の甚しく紊乱せるものあり高等学校とは此の如きものかと驚ける程なりき教師の中には名教授もありたれど品行不良のものもあり生徒の強要するままに休講するもの生徒と共に酒楼に登り拳を闘はす者などあって」（『廓堂片影』895頁。下線部は引用者による。）にもとづいている。この回顧がいつ書かれたものかは不詳であるが、『時習寮史』も『廓堂片影』も昭和戦前期になって四高栄光の足跡や北條時敬の業績を偲ぶ目的で編集された文書であることに留意しておく必要があるだろう。

むしろ、同時期の校風論の高まりは、日清戦争後明治三十年代にかけて教員を中心とした人々の学生へのまなざしの変化、あるいは学生自身のアイデンティティの変容をめぐる模索と苦闘の過程を映し出しているのではないだろうか[注1]。

この時期に、明治維新以降の立身出世主義に陰りが見えはじめ、学生の関心が天下国家を論じることから個人的問題へと移行し始めていたことを指摘したのは筒井（1995）である。「成功」青年、「堕落」青年、そして「煩悶」青年の3つのタイプの類型はこうした社会状況を背景にしているという。では、学校内の学生集団としての校風論の高まりは何を説明してくれるのか、小論の問題関心はここにある。

そこで、様々な社会集団にまつわる文化的な「伝統」の多くが、ある時期に「創られた」ものであることを指摘したE.ホブズボウム（1992）の議論を参考にしたい。彼は、「伝統」というものを、

急激な社会変化を経験した集団による、アイデンティティを表明するための、あるいは社会的な結びつきを確保するための、作為的な政治過程として捉えたのである。

小論はこの視点をヒントに、四高の「伝統」がどのように「創られた」のかについて、当時の四高の置かれていた社会的状況に照らしながら、学生間のヘゲモニー争いの内実に迫り、事実関係を紐解いていくことを目的としている。

1. 校風論の端緒と「超然主義」

考察にはいる前に、旧制高校において「校風」あるいは「校風論」が語られ始めるのがいつ頃であるのか、おさらいをしておこう。先行研究は第一高等学校（一高）の事例を中心になされてきているが、それによれば、「校風」を最初の言及した記事は、『一高校友会雑誌』第1号（1890年11月）における教授塩谷時敏の巻頭祝辞「我校風以講明道義涵養徳器為教」である。学生の校風論の最初は、野田兵次郎「校風論」（『一高校友会雑誌』第3号、1891年1月）である。また、「校風」と同義（教育目的や教育方針の具現化された学生の学校生活の様式）の用語として、「学風」や「学校の気風」があり、例えば、三高校長・折田彦市は『壬辰会雑誌』第1号で、「我校の気風を養成すると云ふこと是なり、此気風とは如何なる気風なりや」と述べている。そして、学生生活のあり方をめぐる一高のこうした校風論が他の高等学校にも影響し広がっていくのである。

つまり、旧制高校の学生がエリートとしての自負心をもち同志の団結を図っていこうとするスタイルやモットーは、多かれ少なかれ一高モデルの影響を免れていない。一高の代表的な寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」（1902（明治35）年）の一節に「栄華の巷低く見て向ヶ丘にそゝりたつ　五寮の健児意気高し」とあるように、世の中を「俗界」とみなし高い位置から見下ろしていこうとする態度は各校の議論に通底している。三高でも、「屹然として俗界に超越し、粉々たる世潮の間に絶して高く標置し、一種の校風を保持し、滔々たる汚濁を掃蕩せんと期するもの、是れ我嶽水會の抱望にあらずや」（「嶽水會大茶話会」『嶽水會雑誌』第5号、1900）と、その精神が気高く掲げられ、「協同精神」や「協同一致」の醸成のための「校風振起」が説かれるのである。

四高の「超然主義」も「個人超然於塵世之外」などから度々引用される当時の流行語「超然」を借用したものであり、一高の「籠城主義」や三高の「屹然として俗界に超越し」の精神を踏襲している。さらにいえば、世俗を堕落したものとみなし「徳義」を維持するためにこれと一線を画したいとする反俗主義を内包している。夏目漱石の小説『門』に、社交を嫌い孤独な生活を旨とする「宗助」を「坂井」が「超然派の一人」と揶揄する場面が出てくる。『門』の連載された時代（連載は1910（明治43）年、朝日新聞）には「超然」は人を戯けてからかう表現としても使われるほど俗っぽい言葉になっていたのかもしれない。もしそうなら「超然主義」は反俗主義の世俗化という皮肉な運命を背負ってしまったことになる。

それはともかく、では、四高における校風論はいつ頃から興っていたのだろうか。もともと四高は「校風」に対する意識は低かったという説があるようだが、実際のところどうなのだろうか。校友会の意義として「校風の発揚」が標榜されるのは、高等中学校時代に遡る。1893（明治26）年の第四高等中学校校友会の創立趣意書に、「近来青年書生ノ風漸ク放逸浮華ニ趨キ忠厚淳朴ノ徳目ニ衰ヘントス其弊風漸浸シテ我校学友ニ及ブモ亦測ル可カラズ」（『学友会雑誌』第1号、第四高等中学校学友会）との文言が見られるように、かなり早い時期に学生の内部からそのような声があがっていた。高等学校に改変された後、『北辰會雑誌』第1号（1895（明治28）年2月28日）の「序

詞」で、校友会活動の目的として「校風の発揚」が「忠告善導の道」、「運動」、「講文の栞」と共に掲げられている。

一風変わった校風論としては、『北辰會雑誌』第5号（1895（明治28年10月21日）に編輯子「噫我辰章校々風を奈何せむ」と題して、「学校が第二の家庭なり」、「校長は第二の父兄なり」と謳うフレーズである。この学校＝家庭、校長＝父兄になぞらえるアナロジーは、北條時敬校長が1899（明治32）年に行った訓示内容と似ている。1896（明治29）年には、自律的な修養団体として仏教系「道友会」とキリスト系「青年倶楽部」の2つが結成されている。その背景に校風問題があったことは、「我校校風萎靡不振も甚たしければ」この2つの団体が生まれたのは偶然ではない、と『北辰会雑誌』第9号が説明している通りである。同誌は同じ号で、撃剣部懇親会が酒宴で大いに盛り上がった記事を載せているところをみれば、校風を憂う宗教系、非宗教系その他諸々の学生グループの考えが必ずしも一つの運動としては結実していなかったことを物語っているだろう[注2]。

また、「超然主義」発祥の母体となった時習寮についてふれておきたい。「時習寮は人員を限り学生を寄宿せしむ所とす」（1896（明治29）年調）とされ、当初の定員は70名であった。当時、欠員を待つ者も多かったという。寮をめぐる話題は豊富で、『北辰会雑誌』第1号にはすでに「時習寮近況」（寮生某投）、「当夜時習寮茶話会概況」（寮生某投）－「当夜」というのは「大運動会」の行われた当日夜のことーの記事がみられる。同誌第11号と第12号（1896（明治29）年6月20日と7月20日））には河原始二が「時習寮」と題して連載記事を書き、寄宿舎が「他府県人に便益を與へむ為め」のほか「校風発輝の指導者たらしめむか為めに」あると指摘している。彼はまた、一高、三高、五高、山口高校の寄宿舎の規模と比較して、時習寮の収容定員が少ないことを憂い増築の必要性を主張している。寮の定員問題は、1900（明治33）年、「公認下宿」が9つ設けられ（「三々塾」はそのひとつ）暫定的な措置のまま明治四十年代を迎えている。

以上のように、四高においては開学当初から校風をめぐるさまざまな議論が断続的に俎上にあがってきた。そしてようやく、（小論の関心である）河合良成が在学中の1904（明治37）年～1907（同40）年とその後輩・尾佐竹堅などの主導する「寒潮事件」（1908（同41）年）になって校風論は、校風改革運動として結実しそのピークを迎える。このとき2つの神話と伝説－“超然主義”の神話と南下軍での正力松太郎の活躍伝説－が生まれ、校風問題は鎮火していくのである。

2. 時習寮の火災と「38名」の“立てこもり”

「超然主義」が宣言されるきっかけとなった出来事は、1906（明治39）年の時習寮火災である。

3月19日の深夜（20日早朝）午前一時すぎ、時習寮は、炊事場付近より出火、炎はまたたく間に食堂から南寮に燃え移った。懸命の消火活動にも関わらず南寮（140坪）をはじめ376坪が焼け、午前二時二十分頃鎮火した。付近は、県庁、県会議事堂、金沢警察署、市役所、市議事堂、師範学校などの公共施設があり、その関係者や四高生で混雑し、軍隊も非常警備を敷いた。原因は焚き火の不始末といわれる。

当時の時習寮は北、中、南の3棟体制、寮生150名を抱えていた。南寮生には下宿許可が出され、残った者は北および中寮に割り当てられた。だが、「賄所」（炊事場）が全焼したのが致命的で、食事を外部から入れる事になったが、十分な生活環境が保証できず、ついに全寮生に退寮許可が出された。だが38名が寮に残った。このとき、かの有名なエピソードと共に“伝説”が生まれたのである。すなわち、彼らは―――

安易な下宿生活の許されるにも拘らず、敢て不自由を忍び、又蔭口に耐へ、危機に瀕した時習寮を死守せんとする人達であつた。（『時習寮史』24頁）。

この時、有志寮生が決起団結して、寮の再建と寮生活の立直しをはかった。「吾人はすべからく現代を超越せざるべからず」の高山樗牛の理念も反映してか、彼ら時習寮生有志は、"超然主義"を標榜して、世俗を離れて、寮に立てこもり、自己の進むべき道を求めることに専念することを宣言した。四高の校風が自主的に振興し、人間つくりの道場として注目され、その真価を発揮し出したのである。（『四高八十年』43頁）

学生としての生き方への覚醒はかくもドラマティックになされるものか、と思わず感動を覚えるシーンである。だが、少し冷静になってみれば次のような素朴な疑問が湧き上がってくるだろう。

第一に、「38名」の「たてこもり」は、どれほどの期間だったのか。第二に、この期間、彼らはどのようなメッセージを発していたのだろうか。第三に、「たてこもり」は河合良成らの主導する校風改革運動と、どう関係していたのだろうか。第四に、「38名」の寮に残るという選択は、「死守」や「立てこもり」という言葉が含意しているような意志的な行動だったのだろうか。第五に、「超然主義」が標榜されたのは本当にこの期間内であったのか、もっと後になってからではないのか。

これらの疑問に対し、『北辰會雑誌』を中心に他の諸資料を時系列に沿って整理しながら事実関係を確認していってみよう。

3. 時習寮をめぐる河合良成の批判と教師の“秋波”

まず第一の疑問であるが、「38名」が、火災後の不便な環境で自炊生活した期間は、同年7月までの4ヶ月間にすぎない。この期間の寮の模様については、寮の外部にいた河合良成が『北辰會雑誌』に投稿した「時習寮の過去現在未来」（『北辰會雑誌』第43号、1906年3月25日）に語られている。そこでの時習寮は、「沈滞の時習寮也、萎微の時習寮也」と非難されている。寮は校風振興の拠点となるべきなのに、往年の「健児意気将に天を呑まん」としていた頃と比べ、現状は「悉んど存在せずと云ふも可也」という。寮生の人数が減ったこと自体よりも、寮内の雰囲気が「消極的」「内気的」になってしまっていることが河合にとって面白くなかったのである。

同年秋になって寮は学生の収容を再開し、下宿先からの帰寮者も含め総員80名になった。再開後の寮についても河合は辛辣である。『北辰會雑誌』第45号（1906年11月19日）で、彼は、「平和」を取り戻した寮に「安住」し「婦女子の如き消極的平和に恋々たる」生活を送っている寮生たちを非難している。そして彼らに対し、「奮つて外洋に漕ぎ出ざるべからず」と叱咤するのである。校風の発揚を寮を起点とし、その「寮風」を振興することで展開しようと目論んでいた彼にとって、現状の四高は「全く惰眠を貪つて」おり「萎微せる校風」に陥っている、とみなされたわけである。

もちろん、彼の批判を字義通りに受け止めてはならないだろう。次節にみるように、この批判には彼のある戦略が込められていたからである。それよりも、河合のこのような寮批判に対し、「38名」から何らかの反論やメッセージが発せられた痕跡がないのが不思議である。エピソードによれば、“超然主義”に相当するメッセージは、孤高の「たてこもり」期間中に、つまり同年7月までには発せられたはずである。もしそうならば、河合がそれに対して何らかの反応を残していてもおかしくないが、それもない。というわけで、第二の疑問に対しても、Noというのが正解であろう。

寮の「沈滞」については、火災前から懸念していた人物がいた。西田幾多郎である。彼はたまたまの火災直後、山本良吉と堀維孝に送った書簡で時習寮に言及している。それによれば、「昨夜我校の宿舎一棟焼失す。精神先つ亡ひて形骸も之に伴ふものか」（1906年3月21日付、山本良吉宛の書簡）、「昨夜我校の寄宿舎より出火三棟の中古き分全く焼失嘆息の至りに候。今年は實に寄宿舎のタヽリ年とてもいふへきか」（同年同日付、堀維孝宛の書簡）と記されている。西田は、この寮を「精神先つ亡ひて形骸も之に伴ふ」と皮肉るだけでなく、当時の四高全体を、教師も生徒も「独善主義に傾き無気力極まる」（1905年5月18日付、堀維孝宛の書簡）と観察していた。河合と西田の眼差しは奇しくも一致していたのである。

すると、「38名」の寮に残るという選択行動がどれだけ意志的な行動だったのか、という第四の疑惑が深まる。どうも当初、彼らは、自分たちが寮内に残るという選択をしたことを「立てこもり」であるとは自覚していなかったのではないか。そもそも不便な寮環境の中、自炊生活を余儀なくされたのは、下宿代の問題など経済的理由が大きかったのではないかとも勘ぐりたくなる。このことを裏付けるのが「38名」のひとり小林鉄太郎の証言である。

> 火災後間もない三部医科の独逸語試験に和訳問題として、「三十六人の感心な生徒達は彼等の焼け残った学校に踏みとゞまり校風刷新のため不自由を忍びつゝ自炊生活を開始した。云々」(注3) の文が提出された。「何だ之は俺達のことを言ついてゐるのだ、私達の寮に残留してゐることが校風刷新上に関係があるのだ、かう気がついたのは少くとも私自身にとつてはこのドイツ語の試験問題からでした。　（小林鉄太郎の回顧『時習寮史』27頁）

この証言によれば、彼らが自らの行動を校風振興上意味あるものとして自覚的に捉えるようになったのは、ドイツ語教師・三竹欣五郎の示唆によるものだったことになる。先の“神話”にみた「敢て不自由を忍び、……（中略）……、危機に瀕した時習寮を死守せんとする人達であつた」との文言は、和訳問題の「校風刷新のため不自由を忍びつゝ自炊生活を開始した」に由来していたわけである。出題した三竹欣五郎は、西田幾多郎の盟友でもあり、学生指導に熱心だった。当時、生徒監を務めていた彼＝教師が、学生たちの行動を“意味あるもの”として気づかせ、これを賞賛し鼓舞したのである。

三竹が寮生たちに対し、背後から秋波を送っていたことをどう解釈すればよいのだろうか。彼の個人的な思惑や生徒監という役目柄からくるお節介、という説明では物足りない。すると、彼の行為の底流に、明治三十年代後半以降の「教師－生徒関係」の変容という潮流があったことに気がつくだろう。この変化は、西田幾多郎の感じた「独善主義に傾き無気力極まる」雰囲気の原因でもあった(注4)。

すなわち、それまでの四高は、西田が師と仰ぐ北條時敬校長（在任期間：1898（明治31）年2月～1902（同35）年5月）の薫陶方針にみられた如く、学校＝家庭、校長＝父、のアナロジーによって、教師が学生をその人格によって陶冶していこうとする雰囲気が濃厚であった。北條の肝いりで作られた「三々塾」（西田主宰）をはじめとする公認下宿は、そのための重要な師弟教育の場と位置づけられたのである。

しかし、全国の旧制高校を席巻した校風改革運動は、このアナロジーを解消し、学校や寮は、学生の自治・自律による自己研鑽を行う場であることを内外に宣言することを目指していた。当時の四高はその過渡期であり、従来の“親密な”「教師－生徒関係」を見直し断ち切ろうとする吉村寅

太郎校長（在任期間：1902（明治35）年5月－1911（明治44）年8月）と、この動きを訝しく感じ批判する西田・三竹との間に微妙な確執が生じていた。「三々塾」は、そのメリットよりも弊害が懸念された。吉村校長は、教師が自宅に生徒を下宿させることも厳に慎むべきこととし、一年生全員の寄宿舎入寮の方針を検討させていた。

こうした当局の方針の変化について、西田は「学校に於ては妙なる處に考えを置き徒らに教師なる者の心事を疑ひ教師と生徒との間に親密なる関係の生ずるを喜ばざるの風あり」と当惑していた。「西田が多少力を注いで教育せば西田一流の気風を傳染するは不得已」と自負する彼にとって、「寄宿舎といふ如き者は必しも完全なる教育場にあらず、三々塾の如きは遙に之に勝る」場であったからである。そのため、彼は「小生などは学校の方にては眼の上の癌の如くに思はれ」ていると自嘲する日々を悶々と過ごしていたのである。

西田や三竹のようないわば“古い”師弟関係に理念を抱く教師にとって、この時代の変化には忸怩たる思いがあったろう。そんな中、三竹の学生への“秋波”は、彼＝教師が、学生指導の前面から退く代わりに“黒子”としての機能を演じようとするオルタナティブ（alternative）な教師像を模索していた、と捉えることができよう。

時習寮の「38名」は、彼らの日常生活や気持ちとは無関係なところで、「校風」をめぐる様々な人々の思惑と葛藤が交錯する渦中に棲息していたのである。では、学生のイデオローグ・河合良成は、校風改革運動について何を意図し、どのような戦略をとろうとしていたのだろうか。

4. 河合良成の校風改革運動　～時習寮非難から「南下軍」へ～

河合良成は、富山県福光出身、1904（明治37）年9月入学、1907（同40）年7月卒業の世代である。実家は、酒造業や海運業などの事業に携わっていたが、不運も重なり次々に倒産するという不遇な環境の中で成長した。高岡中学から四高へ首席で入学したといわれる。「三々塾」で西田幾多郎に師事した、というより、西田のたっての願いで入塾した。ちょうどその頃、同塾に寄宿する学生の実態を嘆き今後の方針で悩んでいた西田は「此の塾の主任を学校に信任厚き河合　茨木　林等の諸君の中に願ふて十分学校の信用をつな」いでいけばどうか（1905（明治38）年5月18日、堀維孝宛の書簡）という思惑をもっていたところであり、その通り河合を招聘したのであった[注5]。河合は当局からの信頼厚い人物というだけでなく、『北辰會雑誌』の編集主幹で、校風刷新運動の首謀者、また、「南下軍」のマネージャーでもあり、この時期の四高のキーパーソンとして重要な存在である。四高卒業後、東京帝大・法学部を出て農商務省に入省、東京株式取引所常務理事、東京市助役、農林次官などの官僚生活を経て、貴族院議員に転身した。戦後は第一次吉田内閣の厚生大臣、小松製作所取締役会長、そして衆議院議員を歴任している。正力松太郎とは中学の同級であり、生涯の親友であった。

河合が「校風」に対する彼自身の思いを公表したのは、一年生だった1905（明治38）年春（当時は秋入学なので入学年は1904（明治37）年）、『北辰會雑誌』（第40号、1905年4月）に「冷語」というタイトルで、学生の活気の無さ、演説部の不振、金沢の気候風土を批判する記事を書いたのが最初であった。それ以後、四高の中心的イデオローグとして校風改革運動の急先鋒に立っていく。

> 優良な一インテリ学生が二年生、三年生には校風刷新運動の先鋒であり、『北辰會雑誌』の誌上や演説会などにおける煽動者であり、鉄拳制裁の指導者でもあり、さらに発展して南下軍の

代表者でもあった。このように私の二年生以降の時代はまったく『学生的政治家時代』といってよい。（河合良成『明治の一青年像』、124頁）

彼の戦略は、「軟文学を排す」「金澤人士の偏狭」（第45号、1906年11月）にみられるように、金沢の文化風俗を「紊乱」として斥け、学生の文芸趣味を「軟文学」として排撃することで、他学生に対して論争をふっかけるというスタイルであった。例えば、金沢の地勢風俗については、「風俗は淫靡也、気候は不順にして雨のみ多し……実に青年の客気を消耗し、豆腐の如く軟化せしむるには殆んど理想的の地なり」と皮肉る。そして、そんな土地に「浮遊する六百の青春」には、石垣を廻らした不可侵の「時習寮」があるではないか、と目を転じる。ここから寮風論を展開しようとするのである。

現下の時習寮を「沈滞」「萎微」として攻撃していたのも、戦略の一環であったわけだ。このような思考スタイル―世俗を堕落したものとみなす「反俗主義」に立脚し、そこから学校生活を考える―は、彼のオリジナルというよりも、一高をはじめとした校風改革運動の踏襲である。一高で校風論が最も盛んな年は、1901（明治34）年で、校友会雑誌が「全く校風論に化す」（「文芸部部史」）ほど校風論一色となった。その際、標的となったのは寄宿寮であった。「元気の鎖沈」「愛寮心の欠乏」「徳義の衰退」「趣味の低落」（吹田順助「病源を論ず」（『一高校友会雑誌』第124号、1903年3月、1-12頁）といった寮批判の言葉が発せられるのは、校風論への布石としてのいわば定石であった。

ところが、河合の場合、時習寮を標的とした一高の“二番煎じ”戦略は失敗に帰す。期待したほどの支持はおろか思わぬ落とし穴が待っていた。校風改革運動は、「始まった途端に主唱者の河合君は脱退」（品川主計の回顧『四高八十年』57頁）する羽目になったのである。

その第一の原因は、時習寮の規模が小さく、また、一高のような一年生全員に入寮を義務づける仕組みではなかったので、全学生を巻き込むような関心事とはならなかったからである。いわば、彼は“肩すかし”をくらわされる格好となった。寮の定員は当初（明治29年）70名、明治39年当時でさえ150名、全校生の四分の一程度であった。その期間、寮の収容規模の拡大を説く議論が学生の間で起こらなかったわけではないが、実現しないままだった。

第二の原因は、金沢の文化風俗を罵倒したことによって金沢出身学生（最大派閥として「加能同志會」が組織されていた）の逆鱗にふれてしまい、校風論とは離れたところで感情的な対立が生じてしまったからである。藤井悌は、「河合良成君に與ふる書」（『北辰會雑誌』第46号）で河合の言動を軽率であり傲慢であると非難した（「学校全躰に對して敵を作らんと企つ、何等の不埒ぞ、何等の不心得ぞ」）。また、ペンネーム「は、し生」は「何ぞや」（同号）と題して、河合たちを「校風発揚の美名を飾りて擅（ほしいまま）に其勢力を扶植せんとする者」とみなし、「記せよ、北辰校六百の健児は一派の人士の傀儡に非らさる也」と啖呵を切った。富山県・福井県VS石川県、という地縁的な対立図式が顕わになったのである。

河合は、「牛耳屋」であった。「牛耳屋」とは戦前期の学生用語で、リーダーシップのひとつの姿を指す用語である。例えば、教員・三竹が、「京都帝大に於てはまづ我が卒業生牛耳をとり居る有様なり」（「時習寮大茶話會」『北辰會雑誌』第54号）と賛辞を送っているように良き意味で使われることが多かった。このタイプの特徴は、竹内洋（1999）によれば、「大言壮語しながら集団の世論指導者になっていく人間像」で、「発言の内容よりもTPO（時、場所、場合）を考慮して効果的な自己呈示をおこな」うこと、そして教養（学歴貴族文化）と伝統的文化の使い分けという二重戦

略をとること、である（竹内、279-284頁）。この理念型に比べれば、河合は、情熱ばかりが先走った純真だが甚だ不器用な「牛耳屋」でありすぎた。自身も後年、次のように振り返っている。

> 日露戦争の刺激をうけ、……、私の純真な魂が、愛国的というか、民族的というか、そういう時代思潮に巻きこまれていくのをいかんともすることができなかった。そしてそれに青年期特有の一種の衝撃性が加わり、私をして四高において夜叉のごとく狂わしめ、北辰会雑誌上の校風刷新論となり、弁論部における演説となり、新入生歓迎会の言動となり、「南下軍」となり、悲しむべき鉄拳制裁をも伴ったのであった。　（河合、前書、130頁）

四高を卒業して東京帝大に進学した河合は、自己の文学や哲学でのコンプレックスに苛まれノイローゼとなる。彼のノイローゼは、竹内の指摘するように、二重戦略を放棄し教養主義の理念型に近い生き方を志向したために自らの内部で発症した「不安と不機嫌」によるものだったのかもしれない。

さて、このような予想外の四高生の反応によって、当初の目論見が頓挫した河合は、残された在学期間を運動部による対外試合イベントへと方針転換を余儀なくされる。「南下軍」である。これは、三高（京都）と六高（岡山）との対抗戦のために京都へ赴いた選手団のことで、河合が中心となり正力松太郎も加わり立案し実行したものである。その目的は運動部の活力喚起、四高生全体の気質発揚、そしていずれ帝大で同級となる高校生同士の親睦であると謳われた。

実は、運動部の対外試合が校風振興のために意義ある、という見解は河合のオリジナルなものではなく、一高で先例（中島庚「校風と運動家との関係を論して京都遠征に及ふ」（『一高校友会雑誌』第34号、1895年））があって以来、河合をはじめ学生の多くが諒解するところとなっていたのではないかと思われる。というのも、旧制高校学生たちは早い時期から相互に校友会誌を交換して、誌上での情報ネットワークを形成していたからである。このネットワークは、少なくとも明治二十年代後半から形成されており、一高の校風論や寄宿舎改革の情報もほぼリアルタイムで入手されていた。

四高で校友会誌の交換がどのような情報交流をもたらしていたのかを端的に示す例をあげておこう。1895（明治28）年、「学友会」解散の後を受けて再結成された「北辰会」がその機関雑誌『北辰会雑誌』を刊行するにあたり、編集者は「今や再禿筆を洗つて起ち全国六高等学校の同朋諸君と誌上相見ゆるの機運に際す、何等の幸ぞや」（『北辰会雑誌』第1号、1895年）と自覚していたし、また、誌上には、例えば「愈虐直言生」のペンネームで「第一高等学校校友会雑誌第四十三号を読む」（『北辰会雑誌』第1号）の論説記事が書かれているように、「批評」欄などで他校の校友会雑誌の読後批評が載せられているのである。

一高の校風論や寄宿舎改革の情報も、四高雑誌部へリアルタイムで入ってきていた。一高を「準拠集団（reference group）」として憧れる地方の学生にとって、とりわけ河合良成のようなイデオローグにとって、このネットワークの影響は大きかった。なぜなら、そこからの情報は、彼らの心情を刺激し、意志決定や行動のモデルとして「予期的社会化（anticipatory socialization）」を行っていたと考えられるからである。

また、河合が一高の先例を模す形で対三高戦を思いついたのは、先輩世代が1901（明治34）年の春に実施した「南下軍」の先例があったからでもある。この「原・南下軍」の記録は三高の『嶽水會雑誌』に詳しい。これによれば、対抗戦は四高が三高に申込む形で成立し、野球と撃剣の試合

を戦わせている。「金澤の健児一日、諸種の競技を吾校に挑む、吾校快諾期する處あるものゝ如く、健児亦練る處あるものゝ如し」（同雑誌、第12号））と両校学生にとって刺激に富んだ楽しみな交流戦であったことが窺える[注6]。

こうした背景があって、河合世代による「南下軍」の再興が練られたわけである。

5. 正力松太郎はいかにして三高の大将・小島を倒したのか？

さて、“記憶”に残される河合世代から始まる「南下軍」の第一回は、1907（明治40）年3月に実施され、野球・庭球・剣道・柔道の各運動部と応援団の総勢二百名が参加した。正力松太郎が四高全校のというよりも金沢市中のヒーローとなるのはこの「南下軍」においてである。本節では、正力がなぜヒーローとして称えられたのか、その経過をみていくことにしよう。

「南下軍」の編成と準備には余念がなかった。弁論部による壮行演説会や後援会による寄付金募集もあり、また、応援歌である「南下軍の歌」（作曲：梁瀬成一　作詞：高橋武済）も作られた。学校側も全面的に支持し、吉村寅太郎校長は選手たちの三高寄宿舎での宿泊のための労をとった。出発の前日、選手団が講堂に結集し、マネージャーである河合良成と正力松太郎を中心に水杯が酌み交わされた。試合に敗れたら髪を切って坊主になると誓い合った。

だが、「結果の経過は惨憺たるものであった」（河合　1969、144頁）。野球部が1対10で破れたのをはじめ、庭球、そして撃剣も「四高の大将が三高の七将に討たれて、七名をのこされるというような始末」（正力松太郎の回顧）だった[注7]。（後述するように三高側の記録では、対戦成績がこれと微妙に異なっている。野球は0対14、撃剣は四高の大将が三高の六将に討たれて6人残しで敗退している。）「かくていよいよ最後の望みが第四日の柔道だけにかけられた」。この試合で、正力松太郎は三高の大将・小島と対戦する。

> 一礼して立ちあがると、ぼくは、いきなり「えいっ」と気合もろとも、巴投げをかけた。まともに勝てる相手ではないので、必殺の奇襲をかけたのである。不意をつかれた小島は、からだをひねったが及ばずどたりと横に倒れた。一瞬ぼくの手は彼の襟ふかくにかかっていた。すかさずぼくは、うしろに回って両手で一気に両襟を絞めた。
>
> （正力松太郎の回顧『四高八十年』55頁）

正力の「必殺の奇襲」による巴投げが功を奏して三高に勝利した柔道部は、翌日の六高との試合でも勝利する。

帰沢した選手団を待っていたのは、花火を上げる大歓迎で、北国新聞社と四高の門前には「正力、敵小島大将を倒す」との看板が大きく掲げられ、正力の裸の写真が飾られた。「南下軍」は、正力松太郎の獅子奮迅の大活躍で、なんとか面目を保つことができたのである。

以上が金沢市民を歓喜させ、その後も四高史に語り続けられている正力の“超人的な”活躍譚である。四高側の資料が少なく、これまでその内実が明らかにされてこなかったが、幸いにわれわれは三高の校友会雑誌『嶽水會雑誌』第36号で詳細な対戦記事を知ることができる。同誌では、「雑録」中に「四高を迎ふ」と題された記事のほか、「部報」中に野球部は「對四高試合」と題して、撃剣は「第二戦―撃剣紅白勝負」と題して、柔道は「第三戦―柔道紅白勝負」と題して、そして庭球は「四高對本校庭球試合短評」と題して、それぞれの試合経過が詳しく綴られている。この資料に依っ

て、次に「南下軍」の対三高戦を詳らかにたどってみることにしよう。

第1戦の野球は4月2日、三高グラウンドで行われた。ちょうど三高野球部は対一高戦のため東都遠征を翌日に控えていた。「東上せんとする吾部が今破られては實に面目がない」というので、対四高戦の研究が重ねられ綿密に作戦が練られていた。午後1時半に四高選手は白の小旗を手にした数百の応援隊に迎えられて入場、応援隊もそのまま場内を一周して一塁と本塁の間に陣取った。午後2時試合開始と同時に、四高応援隊は南下軍の歌を合唱し、「フレー、フレー、フレー、四高！」と盛んに応援を始めた。「彼我選手は入り乱れ必死となつて戦ひ」、だが結果は0対14で四高の惨敗であった。

図1　撃剣の対戦表『嶽水會雑誌』第36号、92頁

図2　柔道の対戦表『嶽水會雑誌』第36号、98頁

翌日は三高野球部が東都遠征へ出発の日であった。朝、三高部員が京都七条駅に来てみると、三高関係者に混じって四高野球部員たちが見送りに来ており、共に彼らの門出を祝い告別の辞を捧げたのであった。

第2戦の撃剣は、野球試合の翌日、4月3日に三高道場にて行われた。午前10時試合開始、各々19人対抗の紅白勝負（四高は「紅」）であった。試合は四高の大将・関谷吾一が三高の六将・市毛保に倒されて惨敗であった。「必勝を期せし第二戦にまたもや大敗を招き、衰残の乱軍、捲土重来素を失」い、「彼、南下の歌を唱ふるの勇なかりき」と『嶽水會雑誌』は締めくくっている。

四高側で奮闘したのは六将の渡邊二郎で5人を打ち抜いた。渡邊は「粗髯の荒武者」で「獅子奮迅の勢を以て無二無三に阿修羅の如く狂ひまはれば…（中略）…、敵ながらもその剛勇賞するに餘あり」と称えられている。

第3戦の柔道は、撃剣試合のあと、すなわち4月3日の午後、同じ三高道場で行われた。撃剣にも敗れた四高は「連戦連敗、血にまみれ僅に餘命を保ち天涯百里の異郷に、衰残の恨を呑む、今や南下軍が一縷の望をつなぎしもの、この一戦のみ」といった悲壮な状態でこの試合を迎えることとなった。各々17人対抗の紅白勝負であった。

勝敗は四高優位ですすめられ、四高側7人を残して三高の大将・小島友三郎を引っ張り出した。小島は「名にし負う柔道界の名手」（「三高對六高柔道仕合記事」同誌112頁）として名声を博していた選手であり、「眼光燭々として鋭く、その態度、堂々として侵す可らざるの威儀」を漂わせていた。

そんな小島に、四高は三将を務めていた正力松太郎が挑んだ。正力は「つと寄りて、むづと組」みに行った。両雄、虎躍龍騰して互いに秘術を尽くして攻めた。だが決着は意外に早くつく。小島が「やつしまつた」と絶叫したと見る間に、正力は小島を押込んでいた。「敵は乗じて将軍を押込み、命のあらむ限り、怪力をつくせば、五體の疲れは、これより免るゝを得ず、煩々悶々、九死に一生

を得んと試みしかれども、かくては醜しとや思ひけん、潔く討死を遂げぬ、将軍の末路何ぞ華々しきや」と、一分二十秒のドラマであった。

ここで冷静になってみよう。実は、正力松太郎が小島と対戦したのは小島がその前に四高の水島政一（6分45秒、外掛）、細貞松（6分50秒、外掛膝車）、菅原健松（7分5秒、押込）、川尻浄環（3分30秒、外掛）の4人を倒した後であった。つまり、小島は彼らとの計24分10秒に及ぶ格闘で「身鐵石に非れば、数度の戦に将軍既に疲労を覚江、剣は折れ、馬は倒れ」た状態に陥っていたのである。「部下の将師一人として生ける者なく、身一ッとなりては息ふ由もなく、眼光血に燃江て、気息将に乱れむ」という疲労困憊の小島に正力は「むづと組」みに行ったわけである。客観的にみて、勝負は小島に相当過酷であったと言わざるを得ない。正力は、“瀕死の将軍に最後の“とどめ”を刺す僥倖に巡り会ったのである。（もちろんこのことは正力の柔道家としての技量を何ら貶めるものではない。）

ところが、南下軍のマネージャーのひとりであった彼にこの僥倖が回ってきたことが四高生の溜飲を大いに下げ、金沢市民の熱狂を倍加させたことは確かだろう。正力松太郎は富山県射水郡出身、四高卒業後、東大法学部から警視庁に入庁、警務部長を経て、読売新聞社社長、貴族院議員など歴任。読売巨人軍のオーナーとして著名となった。

さて、第4戦は庭球試合であった。4月5日、午前9時36分プレーボール。柔道で名を馳せた南下軍の歴史はこの庭球については沈黙を保ってきた。この日の四高庭球選手の意気込みは大きく、庭球仕合が南下軍の成否を分けるものとみなし、また少なからず自信をもって試合に臨んだ。午後3時40分まで14組のダブルス戦を展開、だが四高は相手に4組を残され敗れた。戦評として、四高はのべて後衛が強球を得意としているがモーションやコントロールには余り注意をしていなかったのに対し、三高選手はロビングを多用しコントロールに秀でていたことが勝負を利していたことが記されている。また、河合良成は庭球試合に選手として参戦している。戦評を読んでみると、「河合今田對山口気賀此も取り立てゝ評する程のことはない、山口組の勝つのは當然の事」とある。河合は庭球の専門家というよりも、野球や庭球などいろいろなスポーツに幅広く親しみ、またとりわけ登山の愛好家であった。

おわりに　～誰が“超然主義”の神話の立役者だったのか？～

これまでみてきたように、四高の校風改革運動は、明治三十年代後半以降に、学校を人格形成のための重要な場だと考えるようになった学生たちが、理想の学校生活の在り方を模索していく奮闘の過程であった。そこでは、自身のアイデンティティを確立していくために、仲間たちとの関係をどう取り結んでいくべきか、ということが主要な関心事になった。共同生活を営む寮や塾が、象徴的な場として論争の槍玉にあげられる所以である。

同時代はまた、教師をはじめ人々の学生へのまなざしが変化していこうとしていた時期でもある。それぞれの教師たちは、学生との関係をどう取り結んでいくべきか、についての葛藤があり、従来とは異なるオルタナティブな「教師－生徒関係」の模索が続いていた[注8]。三竹にみられた、学生の背後にあって、様々な示唆を投げかけ“黒子”として糸を操るスタイルは、新しく見出された教師像のひとつであった。

「超然趣意書」の提出と「超然主義」の標榜は、こうした彼らの奮闘のとりあえずの答えであった。では、この「趣意書」が、いつ、誰によって提出されたのか、についてみておこう。「38名」のう

ち、卒業まで寮生活をしたのは、わずか9名であった。「超然趣意書」は、1908（明治41）年の秋（同世代の卒業時）に、寮代表者から校長（吉村寅太郎）に提出された。河合良成が仕掛けた寮への問いかけは、皮肉にも彼が寮風運動から「脱退」し卒業したあと、ちょうど火災から2年半たってようやくその答えが出されたのである。

時習寮が「超然寮」のニックネームを冠し、「超然主義」とは何か、が自問されるようになるのは、これ以後の話である。「38名」が「三十八士、口敢て人を動かすに足らず、態度敢て華々しきものあらむ。而もその誠意は耳口ある志士を奮起せしめ遂に校風発揚論の先駆をなす」（「時習寮大茶話會」『北辰會雑誌』第54号）と英雄視され、寮風会が結成され「超然主義ヲ標榜シ、純良ナル寮風ヲ発揚シ、是ヲシテ校風タラシムル」と謳われるのは、1909（明治42）年になってからである。神話はこの頃に“創られた”のである。

ところで、「超然」という用語は、高山樗牛からの引用として強調される面があるが、当時の流行語でもあり、実は河合自身も、時習寮を表現するのに「超然塵外に聳立して俗流を白眼に附し」（「時習寮の過去現在未来」第43号、1906年3月25日）と用いている。そう考えると、「超然主義」は、「38名」だけでなく、河合良成らの校風論者、そして三竹欣五郎のような教師たちも含めたすべての四高関係者たちによって、議論され、試行錯誤された賜物であるということもできるだろう。

四高の伝統は、今日までの四高生全員の学生生活の足跡として、日々新たに問い直され、創られてきたのである。

【注】

注1　例えば、1897（明治30）年6月に第五高等学校校長であった中川元が示したように、エリートの卵である学生が社会の「腐敗せる空気に感染」（第五高等学校竜南会『竜南会雑誌』第58号、75頁）するのではないかという不安や、あるいはそのような社会風俗に対して学生自身が無関心であることへの不満が明治三十年代以降高まっていたことは、数々の一次資料が裏づけている。

注2　学生へ禁酒令が発令されるのは、第5代校長として北條時敬が着任してから、1900（明治33）年の夏のことである。

注3　「三十六人」となっているのは「38名」のうち2名が退寮した為である。

注4　以上の西田の書簡は、西田幾多郎『西田幾多郎全集』第18巻（岩波書店）、1966による。

注5　三々塾入塾後、しばらくして塾員の態度に不満をもった河合は退塾を西田に願い出る。「退塾がいけないなら、現在おる塾生全部出てもらいたい。そして私が新たに塾をつくり直す。この考えをお認め下さらば、私は塾にとどまります」と宣言する河合に対し、西田は「ウンよし、君のいう通りにする。みんなに出てもらう」と応じたという（以上、引用箇所は河合（1992）、94-95頁）。西田にとって河合の申し出はまさに“願ったり叶ったり”であったろう。そして、河合が新たに入塾を許可したのは、品川主計や尾佐竹堅など7名であった。

注6　先輩世代による「南下軍」（1901（明治34）年実施）の結果について述べておく。野球は三高グラウンドにて午後2時から始まり接戦となった。「攻守交々其度に適し、虚々実々、各々奇計を廻らせしも、中原の鹿は容易に手に落ちず」、結果は4対4の引き分けに終わった。翌日は武徳殿（1899（明治32）年、平安遷都千百年記念に際して設立された大日本武徳会が建築）での撃剣であった。「金澤の健児極力大に、務むる處ありしも、長途の労猶ほ未だ全く愈ヱず、空しく勝を吾に譲りぬ」とコメントされているように、四高の惨敗に終わっている。

注7　四高剣道の敗因として、「四高側は一刀流か無刀流に属するものが多く、太刀は概して太く、躰当りなど

をよくやる流儀で、三高側は武徳会流で、太刀は四高側に比して概して軽快であった。これらの事が主な敗因であったとの説であった。」と謂われていたらしい。だが河合は「しかしこれは敗者の繰言に過ぎず、必要があれば試合前にそれらについて打合せや訓練などを丹念にしておくべきであったと思う」と冷静に反省している。（以上、引用箇所は河合、前掲書、144頁。）

注8　一高の「籠城主義」は、その貫徹によって「生徒をむしろ統制、管理し、国家主義的徳育を達成しようと」する学校側のねらいがあったとされる（『日本近代教育百年史4　学校教育（2)』1974、466頁)。

【文献】

Hobsbawm, Eric;Ranger,Terence , 1992, The Invention of Tradition, Cambridge University Press.

（E・ホブズボウム、T・レンジャー編；前川啓治、梶原景昭他訳、1992、『創られた伝統』紀伊國屋書店。）

井上好人、2009、「菊池幽芳・新聞連載小説「寒潮」に表象された四高生と女学生の恋愛」『金沢星稜大学人間科学研究』3（1)、7-13頁、金沢星稜大学人間科学会。

井上好人、2011、「四高における音楽部の創設－石倉小三郎に集う洋楽愛好者たち－」『金沢星稜大学人間科学研究』4（2)、7-12頁、金沢星稜大学人間科学会。

筧田知義、1968、「高等学校（旧制）の教育と寄宿寮について－校風論の発生－」京都大学教養部『人文』第14集。

河合良成、1969、『明治の一青年像』講談社。

西田幾多郎、1966、『西田幾多郎全集』第18巻、岩波書店。

作道好男・江藤武人編、1972、『北の都に秋たけて－第四高等学校史－』財界評論新社。

高橋佐門、1978、「旧制高等学校における校風」『国立教育研究所紀要』95、147-160頁。

竹内洋、1999、『学歴貴族の栄光と挫折（日本の近代12)』中央公論新社。

筒井清忠、1995、『日本型「教養」の運命』岩波書店。